

## 『習慣教育法』 訳者 桑野礼治



桑野礼治（前列中央）

桑野礼治といっても今では知る人は殆んどいないであろう。明治の文芸評論家高瀬文淵の義弟ということで、あるいは近代文学研究家には知られているかもしれない。だが、明治末年に出た山口競の『全国高等学校評判記』は、五高教師だった彼をこう紹介している。「逸してならぬは桑野教授である。高等常識と綽名きれ、何でも知って居るので有名。本職は独逸語であるが、清語も出来れば、医術開業試験の後期までとって居るとの評判。未だ独身で下宿住居である」（同書221頁）。これによると桑野はいわゆる名物教師の一人であったようだ。教え子の斉藤惣一（明41文）も次のように回想している。

「ドイツ語の桑野先生の存在は特殊な記憶として残る。『生きた百科全書』と云はれる所謂物識りで、ドイツ語を学ぶよりも、何やかやと問題を作っていつては質問する。先生は又それに対して、一々得意になって答へられる。『自転車は誰が発明したのですか』とか、『ネルチンスク條約の結果はどうになりましたか』とか、ドイツ語と何の関係もないことをもち出すといった様な賑やかな教室であった。忠海の海岸で水泳中永眠されたことは惜しいことであった」（『龍南』第238号、昭和12年10月）。

桑野のようなタイプの独語教師は、現在ではもう見られなくなったようだ。旧制高校では外国語、特にドイツ語は教養科目として重視され、時間数も今の大学教養課程のそれよりもずっと多かった。それで教師にも余裕があり、教室で脱線することも時にはあったようだ。旧制高校には個性的な名物教師が多かったとは、しばしば聞くところである。それに生徒は心から教師を尊敬していた。そうでなければ真の教育はむづかしい。今でも旧制高校が廃止されたことを惜しむ声があるのも、うなずける。

とにかく個性的な教師の多かった旧制高校でも桑野は、かなり風変わりな存在であったと言えよう。彼の履歴書が筆者の勤務する熊本大学に保存されているが、彼の性格を物語るように変化に富んでいる。

桑野礼治（のりはる）は、明治5年（1872）3月7日、新潟藩士・桑野礼行の次男として京都に生まれた。兄に正、妹に後年高瀬文淵に嫁いだタカがいた。幼少時代のことは不明である。明治18年（1885）5月、東京浅草の濠西精舎に入り、3年間漢学を修めた。濠西精舎は旧幕臣の小永井八郎が浅草西三筋町に開いた漢学塾である。桑野は漢文をよくしたが、その基礎はこの時期につくられたと見てよい。次いで同21年（1888）5月、東京本郷の独逸語学校に入り、やはり3年間独語及び普通学を修めた。独逸語学校は19年に当時医科大学生であった山縣四郎吉によって本郷元町に開設された私立のドイツ語学校で、明治31年頃まで続いた。教師には高橋金一郎、土肥慶蔵、藤代禎頼らがいた。第一高等中学校の第三部（医科）の入学者の中には同校の出身者が多くいた。桑野も当時は将来は医者になるつもりでいたのではないか。だが履

歴書によると、彼はこの後、神田の大成学館という私塾に入り、6カ月間中国語を学んだのち、フランス語も1年間学んだ。

さらに明治25年(1892)9月、独逸学協会学校に入学し、独語の研鑽を重ね、併せて英語、普通学を修めること2年に及んだ。同27年9月、第一高等学校に入学し、独語、仏語も学んだが、なぜかすぐ退学し、同年10月には理科大学内の人類学講習会に入り、3年間坪井正五郎について人類学、人種学、土俗学を修めた。

以上の学歴から分かるのは、系統的に学ぶというのではなく、興味のおもむくままに色々なもの、特にドイツ語をはじめとする外国語を熱心に学んでいることである。

明治28年11月より32年7月まで帝国大学雇員となり図書館に勤務したが、この間も公務の余暇に文科大学教師のフローレンツ、エック、リース等について独語、仏語、地理、歴史を研究している。が、32年8月には熊本陸軍幼年学校の独語嘱託教授となった。勉強するには便利な東京を去ったのは、待遇の良い方を選んだ結果ではあるまいか。履歴書によると、帝国大学雇員の月給は15円であったのに対し、幼年学校では嘱託とはいえ45円も支給されたからである。さらに、この後彼は陸軍の通訳(奏任待遇)になるがここでは65円もらっている。通訳は最初第五師団付であったが、明治34年には清国駐屯軍付を命ぜられた。そして同年11月には北清事変における戦功により70円を下賜された。だが陸軍通訳は病気のために翌月には辞めた。

その後五高独語科の嘱託講師、陸軍通訳(第六師団付)等を歴任するが、明治39年8月に至り五高教授に就任した。これにより桑野の生活はようやく安定した。

ここで彼の著作を見ておきたい。

『習慣教育法』は明治32年10月、富山房より出版された。菊判、本文136頁。ほかに訳者による小引と、巻末に当時の本に珍しく人名索引が付いている。原著はDie Methodik der Gewöhnung gegründet auf die Menschenkunde und Sittenlehre(人類学と倫理学に基づいた習慣方法論)でウィーンの教育雑誌に載ったものだという。著者はハンガリーの教育家A・レーデラー(1827-1916)である。人間の習慣について詳細に論じたもので、特に教育との相互関係に着目した点に特色がある。「着眼ノ奇警ト叙事ノ適切トハ這般ニ関スル幾多ノ述作ニツキ優ニ一頭ヲ出スニ足レリ」(「小引」とある。桑野によれば、晩近教育上の著訳書は次々と出版されるが、習慣に関するものはまことに少なく、大家リンドネルが自著で特に本書をほめているのは当然だという。その意味で、桑野は、同じ頃『応用児童心理学』(B・ヘルヴィヒ原著)も訳しているが、やはり訳業としてはこの『習慣教育法』を挙げるべきであろう。ドイツ語学者がその語学力を生かしてドイツの教育学書を翻訳するのは、明治時代にはよく見られた現象であるが、桑野の場合もその一環と見てよいであろう。

五高の校友会誌『龍南会雑誌』には明治35年11月号から計8回寄稿した。

	年 月
①漢文新体小品	35・11
②独語の南北	35・12
③言語学管見	36・3
④革新思想概観	36・11

⑤化学閑話	37・2
⑥新体小品三則（漢文）	41・3
⑦サラセン文化略説	41・12
⑧独逸眼に映ずる宇内の現勢	42・12

①と⑥は若い頃学んだ漢学を生かした漢文による新体詩。②はドイツ語、ドイツ文学の地理上の特色を論じたもので、才気あふれるものを感じるが、一面雑なところも見られる。③は五高生のために西欧における言語学の発展から説き起こし、言語学上の法則、特にヴェルナーの音韻法則について解説したもの。自分は専門家ではなく好事家だと断っている。④は18世紀の政治・革新思想の源流を分類して論じたもの。⑤は西欧と日本での化学の発展を略述。⑦はアラビアとペルシャの文学の一斑をドイツの学者の説によってまとめたもの。⑧はドイツをめぐる世界情勢を論じた力篇で、欧州ではドイツが旧位置を回復しようとすれば秩序も乱すとして危険視されるが、その他の国が領域を膨張しても正当化されると述べている。

一方、雑誌『教育実験界』には明治39年に「奥国に於ける労働児童の保護」（18巻5号）「学校と家庭」（同7・8号）「児童学の現況」（同10号）「美意大意」（同11・12号）を寄稿した。

以上はすべて確認したものであるが、ほかに桑野が明治35年8月に五高の嘱託講師に就任した時に提出した履歴書には、訳述書目として「世界通史」と「言語研究法」も挙がっている。ただし、これらが実際に出版されたかは疑わしい。

桑野は、明治45年（1912）8月1日より21日まで五高の独逸語夏期講習会の講師を、小島伊佐美、白川精一諸教授と共に務めた。その後、8月末から広島県忠海町の菊池弘治方に滞在していた。菊池は独逸学協会学校時代からの友人で、忠海町の衛戍病院長であった。9月6日午後5時頃、桑野は菊池と囲碁をしておえて、いつものように夕食前に海水浴をするために出かけた。はじめ海岸近くの浅い所で海水を上体にかけて進んでいくうちに、両手を挙げ二、三回無意識に動かすような挙動を見せ、そのまま水中に消えたという。これを見た児童数名が直ちに小学校に通報し、当直の教員はすぐに漁船を使って捜索させ、そのうち菊池等も馳て来て水中に入って探索したが見当らず、漁師数10名に頼んで大網を入れて海底を探したが無駄であった。翌日も朝から捜索してもなお発見できずにいたところ、ふと章魚釣りをしていた者の針に触れたものがあり、捜索船に知らせ、引上げたところ果して人の死体であった。わずか24時間しか経過していなかったが、身体の各部、特に胸部がひどく魚族に損傷され、しかも顔によっては桑野の遺体であると判断できない状態であったが、他の部分からそれに相違ないと認定された。歯は堅く噛み、腹は膨張していないところから、死因は溺死ではなく、水浴中に起こった脳貧血であると菊池は断定した。屍体は引上げ後直ちに火葬に付した。9月9日、兄の桑野正、妹の桑野タカ、小暮マキの三人が到着したので、独語主任の小島伊佐美は五高から派遣された旨を伝え、弔辞を述べ、弔慰金を進呈した。夕刻、同地の風習で水死者があれば各戸より幾分ずつの寄附を集め海岸で施餓鬼会を営むことになっていて、今回も桑野のためにその会が催され小島も臨席した。

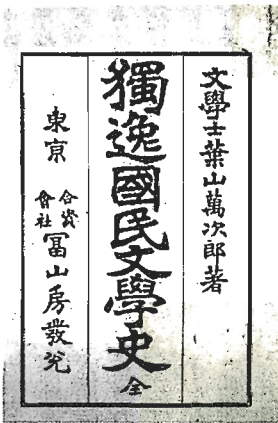
熊本では9月27日午後3時より五高にほど近い浄行寺において、龍南会主催の故桑野教授追悼会が行われた。会する者二百人、杉山岩三郎教授の追悼演説、小島伊佐美による桑野の履歴

書の朗読などがあった（大正元年11月号『龍南会雑誌』）。杉山は次のように述べた。

桑野は幼くして父を失い家庭不如意のため、教育も系統的でなく独立独歩で今日まで来た。彼は片時も本を離さず博覧強記、何んでも或る程度まで知っていた。特に語学では英仏独羅典なかんづく清国語は得意で、近年はアラビア語に熱中していた。彼は同僚にしばしば常識論を唱えていたが時として自ら常識を逸せることもあった。つまり矛盾点なしとは認められなかったが、その性質が却って天才であることを示しているのではないか。要するに、有為な才能を持ったまま世を去ったのは同僚はもちろん学界においても痛恨の至りと思うであろう。

ここには桑野礼治という人物の本質がよく捉えられており何も付け加えることはない。ただ筆者はこの小文によって、今では忘れられた明治ドイツ語教育界の一異才の存在を伝えられたら満足である。

## 『独逸国民文学史』 著者 葉山万次郎



葉山万次郎

葉山万次郎は明治10年（1877）12月3日、松浦武士と学者の伝統をもつ葉山家の長男として長崎県平戸市に生まれた。父・葉山左内は九代目で、松浦家に仕える武士であったが、維新後は型のごとく貧乏士族で、万次郎の学業の前途は暗いものであった。

葉山家の祖先は豊臣家の浪人で、渡辺姓で松浦家に仕えて葉山姓に改めた。その七代目の鎧軒は佐藤一斉の門下の漢学者で、詩人としても定評があり同時にまた松浦静山の重臣で藩政に参与した。嘉永3年に吉田松陰に、山鹿流の兵学を講じ、海防論

「辺備楢葉」を説くなど、経綸の才もあつたらしい。八代日の野内（盤字）は心月公（松浦蟄）の伝役で重臣を勤めたが、学者、詩人というより重厚で大人の風格を備えた実務型の人物であった。維新前、風雲急な時代の藩政担当者の中で、積極派の安藤藤二、堅実派の村尾平格が対立する間に鼎坐して、調和を取りつつ難関を乗切って、主家を西海の藩主から伯爵家に推移させることに成功した。つまり中道を行く地味な実務家であった。万次郎の父左内は、純詩人型で、酒を愛した。豊かな家庭で漢詩文の中で生まれて、趣味に専らであったので、維新後の世渡りには困った。（以上は主に林常夫述「兄葉山萬次郎を偲ぶ」〔ガリ版20頁、昭和36年〕による）

万次郎は明治23年（一八九〇）9月、平戸の私立尋常中学猶興館に入学した。猶興館中学の前身は、猶興書院と称し明治13年に開設されたもので漢学、歴史、算術等を教えていたが、これでは時運に処して普通科目が不備であった。それで一応これを閉鎖し、新に中学程度の私立中学を作ることにした。そして明治20年5月、尋常中学猶興館として開校した。5年制で他の